

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

JAPAN

TAMIA

抄

伊地知文庫  
文庫20  
288  
1



八雲抄序

伊地知氏書冊

和記文庫

支那歎未起自八雲出雲之右風度平文  
聖武之皇廟言象徳主の林道難主降已  
來貴賤統之道徳撫之然而不勞主事也冉  
焉之急恐詠二十一音之句を窺玉劍角和  
礪焉之勢不視上邦詠英雄之詞歌以代  
記文付也髓體解抄一篇先達口傳人教  
誠確可顧問依邦教不廣矣漏滅多第一正

義方一作法方二枝繁節言過才力不才  
六用竟隆非六義之技錦且為一方之鑒鏡也  
錄為六卷名曰八雲抄常量綺廣側湏備廢忘  
而已

八雲抄卷第一

正義教

六義

序代

短方或方

反欵

普通狀一字或稱短方

諸欵

旋頭

混本

廻文

無人不慕

諤諧

折句

胥冠折句

胥冠

物若

贍若

異舛

連欵

八病

七病

七病

七病

六義事

六義事

六義事

六義事



一風といひては風の物をいふべしある也  
といふことをいふといひ  
経済はよそくやうれきをあり

今もまことにそくあらわ

二風といひては風の物をいふべしといひ  
波立つおりへりとま行ひうぐあるありよ可  
を波作といつてかうと

二賊をかうへりやねよめんべしといひ  
さく死のむるのほどのあらまく

力有りてのりふるゆきよめんべし

八雲志

三

古今文選よりも取次  
事多とあつたり

三才之氣也。物生於此，而得其形質者，則爲萬物。故曰：「萬物皆有氣。」

君の御心は  
我の御心より  
遥かに優れ  
る事無し

たる事無く  
まことに  
おもむろに  
おもむろに  
おもむろに

○  
之興亡也。人猶也  
○  
○  
○

と風のまゝ吹き渡る  
古今よりては向むかひの事  
まことに

たぬきあさよの鳴きあり風やく  
わゆるふじまのひめよまむき

此をさういへと古今よりアリ  
カ雅をあらそひ新といふ

蒙古文

古今之學者多矣  
其孰能與于我乎

おちのくも風のぬけ

あれをうきとめらへといひ

六頃をいわひす

あとうらむじかくうるるの

まくはりの紫よのほくせり

是が御神体を御坐せらるまむじういとひま

をもととを今より

すす時ふきのうけとまく

いとまくらみを御そへるん

よきやまくかくくへん

今來要くねうそむくのうまんといえむ

お一木あへいり城のたまふ様をへんうを

第たのひあくまくの道にほきとおきと

いとまくといゆのばくすとくとくへるしと

くわくわくいとくとくとくとくとくとくとく

されも税のくよくとくとくわきとくとくとく

おとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

卷之三

おもひ可れや食よとよるゝ多  
思ひをもつて也すと仰うもあくまの様よかきら  
えりきはふ又わゆるとくすうなり事は之大井原代  
わへ乃山の御はまより  
そりをも  
あれども  
角のまち内 わき  
すまのふを

檢稅使大傳鄉公之統波山時也

うきくもゆく

金華山

牛

已上二章を万葉の中より抜いて此處に記す  
原書をもととがくあり古今以後即ち今本は  
其序稿をもととて後多様勢及形相をもすが故  
ちもやゆる 神音也 今約一うまそ  
是くもわき ちりくま  
みのよの おとくの あさわく  
さしくはよ あらゆきも まぬのをかく  
あれらく われなまて おとくはく  
いやくまきる おとくはく  
名とまな志 うよゆく  
と葉序も因り也古今序が見れ取れが不乃の而  
後接連千載古の序も見る程あり新古今の序は  
尾うさわひく御清美も御めよきく紀稿とく  
内序代もとまへく内くとくとく御からよもと  
アシナ御かくめく御稿とくとくとくとくと  
物やせく見若よくとくとくとくとくとくと  
浦日臣秀とくとくとくとくとくとくとくと  
て御の序らくとくとくとくとくとくとくとく  
短う 球藻もああ絶る御まと後波ちと極よ巨細にち  
御てうきうきのうり程かくセヌキみくとくとくとく  
み文字とそれと枝いセヌキみくとくとくとくとく

よきうむく地やとひのあはせくめくもつてそ  
ゆくすくゆくゆよちるうまくもくらも短くすく  
くふまくと短くもほよもくとれをかくめどんの  
うくくく地をすく地をすく地をすく病をす  
くまくまく地をすく地をすく地をすく病をす  
く地とゆのとづひげへくるねもくまく地をすく  
のうづくもゆくとあくわまくはくとくらむくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

## 短文

舒ゆての空巣も具山里も之附

かずれ

はりて

わくの

年をあまく

## とくとく

じうう短うが洞窟の数の多以難ね魚の方歌  
也がて為わげ外停勢もあう又殊勝也と故ね魚  
あ方の不見後軒述懷もと是ふよ不及充當之患  
岑を滅可抗南旋而儂不盡東方不入之仰深もあ  
短うともあ既源水并源始式よと以之隣短う若海方二十  
機式并新機體船より以之隣短う若海方二十

一字或又短もあ方歌又以三十一字短短う

又古禁中字もと二派うあるもと地名考海方不弱  
掌のういのやれ郭ふとくめうう也後軒云短う乃經

是故有之者也雖不以一毫或失其本源之方以爲一毫  
二毫或三毫也然則豈可謂之一毫也猶言一毫也此絕乎約  
之極也多以爲失也

一  
枚  
奇

後之秋北之多也秋亦大而氣幼也也也也也  
一相因冲氣為本之氣也故曰氣也者冲氣也此其所以可妙也

後於抄寫方也多出也。北系の多見る事大異  
事也。故而以系名之。但方十二右今ね文書未多數  
上手。之をもとて筆走らし。其筆走らし。其筆走らし。  
田耕引とわらひ松可劫

一  
碑  
翁

思ひの事よりはるゝ事もあらぬ事あり思  
ふらるゝ事あり思ふらるゝ事あり思ふら

一函卷

肉食也。傍人多大驚曰「此亦是人歟？」乃問其事。二童  
也。問之。答云「食也。」一也。問二也。答云「食也。」

一相歡

多紀里人方丈十七玄天平十八年八月越中根太作  
池主附大根役赴向魚鄉玄因年十一月是到本役仍役  
約酒之嘉游緣飲樂先日也白雲忽照候地人余以酒也  
漁文之私入海淳潤亥也未わく多喜二耽歌裁彼方  
式喜也幸之每立一ノ思トツヒムラ

旋致す

三十一字より今一もとくてもや善通うも又お見を寄  
也幼々七歳もくもくのうな様にくもぬせまく白雲  
家もとくへりむけりえよちくよしめく下りるも  
じゆくもくでちくもくあくもくのうよがくうくうり  
うくよもくもくきくもくのうれうも  
見もとくもくせまくと風と後耕は爲よどり一方允  
かがくうお耕ううとあくふうとくわりげ  
むくううとくまくうむくわくうくまくせん  
見もとくもくみくもくのうり  
あくげくひじくひじくもくはくううくくはくう  
もくううん人をかくつまのうん

三二ハムウキヘラガナリ

波とうねうこうううまよしげひかくからぬよ  
もくううぬおまれかわくまくちじま

是もかくよけむと入るより  
旅の事はあつたがちに於てはおもい旅の方  
がおほきに思ふておはづくらへばやうと  
て身をすましむとおはづくらへばやうと  
思ふ事もおそれ多くはりとおはづくらへば  
人といふておはづくらへばやうとおはづくらへば  
あはれとおはづくらへばやうとおはづくらへば  
おはづくらへばやうとおはづくらへば

せいひあさり

おはづくらへばやうとおはづくらへば

おはづくらへばやうとおはづくらへば

涙也

三十一年四一月の日をもとより是一月を  
きわめて暮れの日よりはるかに遅くまである  
如きの夕をすこしだからぬ秋の夕

毛うとおはづくらへばやうとおはづくらへば

是の上よ絶えねばれども是の物と  
是がやうせまつてありとまのせよみゆめんせ  
白とあまくとおはづくらへばやうとおはづくらへば  
てひづれやまくとおはづくらへばやうとおはづくらへば  
峰古今序よ一月の日といつておはづくらへば

廻文

乞ふ事の如く御すもおあり様よと申す也  
むしろ御心の如きあらうやうに思ひ  
なれどもその御のそへは

といつて御心の如きをぬよめむがほんとある事のあ  
ゆゑゆゑとある

無ふ不善

万葉十巻によまく御すとわくとあ  
そゆる事の如きあらうやうに思ひ

主觀をもつてゐる事の如きの

せうせうと申す事の如きの

よしよしよひよひと申す事の

おまえが今人親王令約度日成立作事不思之言会  
場以後昂下附大今人安儀約度子孫文の追斯亨獻  
上御時以不慕物殘二万文絶之也

御説

是を以て御とひあわんまく未極る令  
云經の事も不似之而要後うだいとくとくあるも  
久入於後括達經終之入御説うあくやうの  
是經の事は如く誠かに經終不即ひのとされ  
も末代人那うまく入千載葉まわりあくとくよ

タクニタマラムシテミハ推セムモ瓦ニシタクニタム  
ト後搬送干載葉より入るニシモ物類のうち此  
ノ角ノカタヒツヤモジ他乞ト知ルはヨシ  
ヨモギトニサ体可見古今也或後日謝得モシ

一佛塔 二佛塔 三佛鏡 宝滑鑑  
又佛謹 六達字 七宝戲 八鄙鏡

九寶盒 げふるぬま舟之

物句

無口上物リムニシモナシタルム  
カシ衣束はシラビシナシナシナシナシ  
キシシシシシシシシシシシシシシシ  
無口上物リムニシモナシタルムナシナシ  
キシシシシシシシシシシシシシシシシ

物句首冠

是ハ無口上ト下ニ文多シ入ラハリト  
アシナシナシテミハ推セムノ開ナムニ  
ナシナシナシナシナシナシナシナシナシ  
乞ミアシナシナシナシナシナシナシナシ  
ナシナシナシナシナシナシナシナシナシ  
ナシナシナシナシナシナシナシナシナシ

物句首冠

かまくをなすべとがたりあくもれどくまと  
番みくらうぬよしやせむすり

もううあぶせのきやくにほくわく  
てはくすむかくとくとくとくとく

番冠

ねまくらひよまくらひよまくらひよまくら  
もこくとくとくとくとくとくとくとくとく

もくらうくらうくらうくらうくらうくらう

うくらうくらうくらうくらうくらうくらう

あくらうくらうくらうくらうくらうくらう

物石

きくらうくらうくらうくらうくらうくらう

くらうくらうくらうくらうくらうくらう

くらうくらうくらうくらうくらうくらう

くらうくらうくらうくらうくらうくらう

氣ヒれもわざとめぐらしくめぐるやがてせまう  
きみのいもやせのみそりくさむすめはなはれ  
きくかくをうを歎と葉葉吹とうとくとく  
歌カうううううううううううううううう  
あくおりのあくよねとうくらまをほのう  
げうとううううううううううううううう  
歌カうううううううううううううううう  
とよかとよかとよかとよかとよかとよか  
とよかとよかとよかとよかとよかとよか  
とよかとよかとよかとよかとよかとよか

## 鶴翁

是シテうとせとが云極ヒタチくたづくの世人の事  
ひくわくきのかとひくわくきのかとひくわく  
くわくわくわくわくわくわくわくわくわく  
きといあらせうりよけいとひくわくわくわく  
事シテうとがわくわくわくわくわくわく  
てくわくわくわくわくわくわくわくわく  
をせとせとせとせとせとせとせとせとせ  
歌カうううううううううううううううう  
う流リュウうううううううううううううう  
人ヒトうめめめめめめめめめめめめ  
やいづよ小町コウチの事

を絶くかの波う神よむるもひ  
あかんせきあと波浦をなまひ  
葉平朝はよゆくう女よ歎めり  
ほりくらひあらふまう歌うお  
神のひらくわすへもあ  
といつむせうの葉まう女よかく  
波うそ神うひじくめあも川  
力うさうると來うもすのうん  
大哉二位うれ出約きうとまうを  
あり今きゆくとよかうされ  
それみとれもとよかうされ  
やわりうる冷泉流乃はれ事うよ  
とかうのねうまうとよれびと  
えうみとせたうまうゆうへ  
う様うあくわがれうとめう様うわよう  
めうさうもれせばがもわれうとめうれう  
さまと人乃と人傳うとくもくくく  
夢津絛うとくもくうとくもくく  
くよううれとくよううれとくよ  
ともううれとくよううれとくよ  
波浦うあしめうとくよううれとくよ  
波浦うあしめうとくよううれとくよ

とどくかよかうの後後後後ねよばれひよ  
さんだらまきまきの魚といひふく神め乃  
うよわぬるを今多分はれまくわくを  
生まし年あるとへんう車全くくわくをとくえ  
あとそれむかへとく魚は一魚院喜自幼  
喜よよの院の後まくすくすくすくすくすく

は成ち入立

そ乃のやいづらむさくんがくうせの  
おもてまくまくまくまくまく

也

よの院

かゆうみうりうめといまくは是経御つゆを  
用ひ同御するもむれんをこむれんがく  
とこむれんがくのめぐれんはくとくの  
様よひとくうじくく御とくの  
わくわくとくがくくあくとくくく

やくよまくとくとくもまくらうと  
といづらゆのむわくめくとくとくとくとく  
スカキムカムカムカムカムカムカムカムカム

喜平の院よ

えだよだわとくとくとくとくとくとく

來しもまわらるゝを承り乍ら  
是處ひのれ様はあらゆるもの  
あともうまきめぐへたる事半端にせば  
きよくあらゆる所よろしくもせん  
しも今多くもとへぬよもくもくわん  
乃ひよのうと角とあへてゐる  
もととあへてゐる所とあへてゐる所  
きよのうと角とあへてゐる所とあへてゐる所

異解

て後をぬく様に筆をの難能もあらず

連文

まちス十数百枚とげくものあれば手と  
みくも下向てもひう事はまじまうと付  
あり今様よしとす半年ばかりの間を賤相を  
も中止されず万葉才八戸をもとあわせ付之  
る川口もせきわけてうへて四を

家約目

かのうひのひをかくわうぐ

先生歎詠板原やと後成先下坂よ付と又考事よ  
む先どく多きからよ付え考らふかわくを成人

ゆくつるまくふと朝詔旨

義よやうめと稱を乞ひなきる

又天曆

さよの草木今まゆかくありふぢり

滋野田行小翁令也

義よやうへちんやすひらん

是あるよなひのや北朝タゞ而河牙よ多連之辻  
代をせぬり也古き是とせんととてわづれ  
不取はれか実過半を繋多きのれを付之をが  
か東之都到り及未代也可取知るや

一發向うに於南度の爲めに無効人となりて又

財物等を乞ひ入教をすと發向へる御用むて世人

と云ふ也

一發向うに於ひまつてかたのがよからずあとはぬ  
うやうかうもあつたと又まち處所の風氣と御のほ  
一切三弓中をア歌賊めやわくとひぬと御の  
おみづくてもちせのやうくと御のむちとおがくと  
ひきあとつまをもんとあらねりとねや

一三弓年より病とてかく空弓をう肉弓を同  
う弓をうとてかくとてかくとてかくとてかくとてかく  
一弓より一度の事あつてかく肉弓の内にむかうと  
さかひみくみくうがまのまとせかうとせかうと  
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
あらすむあらすむせひとかく月より死く人をと  
かくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
ひまづくとまくとまくとまくとまくとまくとまく  
六ちまくにわざりまくとまくとまくとまくとまく  
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

一是を下句せんぞり思ふよもよ山鶴とて  
てとく人よめのひくと付のうけんこせんばん  
人の風ぬれわんとひかうとてとてとてとてとて

一がまくへるをのぞむわふる様よひのとへまくる  
さりあふくとくおみへをうへれどもまきの  
乃わゆるむすびのとく

一のまくへるをのぞむわふる様よひのとへまくる  
さりあふくとくおみへをうへれどもまきの  
乃わゆるむすびのとく

一のまくへるをのぞむわふる様よひのとへまくる  
さりあふくとくおみへをうへれどもまきの  
乃わゆるむすびのとく

一のまくへるをのぞむわふる様よひのとへまくる  
さりあふくとくおみへをうへれどもまきの  
乃わゆるむすびのとく

一のまくへるをのぞむわふる様よひのとへまくる  
さりあふくとくおみへをうへれどもまきの  
乃わゆるむすびのとく

りをもとへゆきやうあるばかり  
一猪の賊物をもとめに猪くさみをめりぬ  
そ賊禽歎よきのあらひ賊物もわざと詮  
をもとめに猪くさみをもとめに猪くさみ  
猪くさみをもとめに猪くさみをもとめに  
よきよきとすくはんもとめに猪くさみと  
もとめにわんわんしら乃とふわんじきの族よおの  
一あすよのちる賊物も一あすよのちる賊物  
おもまくとくはんとくはんとくはんとくはん  
おもまくとくはんとくはんとくはんとくはん

一圓と多金。以賊物よからむ。後後 まほに  
ふ用うりわ。未ありままで紙物よまのまほに  
あくまほれよがくはんをもとめに猪くさみ  
くさみをもとめに猪くさみをもとめに猪くさみ  
もとめに猪くさみをもとめに猪くさみをもとめに  
無風精物とてくらむよどるむつじふくくまに  
てきくくくらむをわん物のみとてくらむを  
せむくくく桂くく風塵やう御うか事  
教本知多くまくまくまくまくまくまくまく  
ゆくまくとくひもくもくもくもくもくもく  
りひもくさむくヨクとくもくもくもくもく  
もくもくとくひもくとくひもくとくひもく

さんといふ事はまうほどの事無よせを力入り  
あれと思ひてゐてゐるが、それで此の事の  
多くせんわけの事ある方多葉集の事もさう  
ある事もわざとせよの事もあつて  
わざせらるる事ありといひて、彼よみがはれを表  
百句半句せんよなまやかのひのうへきく  
きもすくらうる事ありといひて、庵うやたこまく  
じく風情といへりうそのゆうふたりきどもよ  
きねどもさうな事せきくはればすむや  
秘秀乃道がとく材へくじ一句きあひてとく  
くわく風うむれいとくもあすらんとくも通風明  
月秋の沈や翁わくわくふるよとくひそれ  
くわくようはやくがくきてくらといひ  
まくふくの事あられことひまくふ体勢を揃  
うちもえいのれのまられといひまくも隠れつ  
せむくまくまくまくまくまくまくまくまく  
おまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
よ人皆通電もあまえてもあまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

或上下とぬと又下句せひる歟

八病 表機式

一同人病 或考和蘿聯病

是用う乃二句よあくを句ひゆるをうせん

かねうを送するにすくわきよも

はせりて人を紹とせられ

遍照

さうさん物とひちよまくらえ

おりふまよろこむれらん

躬恵

うそ二わららじ二ひつともあすまを教へると  
今を機縁よ多一後成吉東風休日八病中是ふるを  
花柳郎のうれしに能く地とどくゆめりわくとくゆ  
花柳郎のうれしに能く地とどくゆめりわくとくゆ

二亂恩病 或考和歌連病

是を詞優而うぐあるめり

わひからうめうれの鶴よ々すりく

けまやくみくねよとくのうくれ

せうへせせのほあくるとく

うくじまうきがくくうくらう

ゆうれや正道下ふる人無くわゆ

三相蝶病 或考和琴死病

わきとてそひのくま乃人す  
そくからもといたぬしもひと  
え乃日のまちもひらかく敵と  
そひりてそくかふ事くれ  
あきえ下あの人むじ強わらひせび下せよ陣を  
まきえ下あの人むじ強わらひせび下せよ陣を

室宿病 戒坐也尾病

足痺よ筋ふきり身く約不勞り  
人をねじる乃ねじる筋不勞り

きりまくらとくとくぬもの

足痺

戒坐也

脚筋病

戒坐也

脚筋病

戒坐也

足痺よもくあよもがりく用あり  
きくれも梅ふもくそくりく生

いじきのそくはれとばし

足痺よもくあよもがりく用あり

六老根病 戒坐也翻脚病

足痺よもくあよもがりく用あり  
六老根病 戒坐也

七中飽病 戒坐也

是か三十未だすわらうありふ

さとあくもあきらめひまをまつて

ちるともあくねむ一ゆけとく

きそ海のうぬれうてあくわまの

息もげきわへとねどそそく

きよきようもくちくく旋動あくまくくまく

八後悔病 双腫瘍病 双混也之諦モ疾不治

是多風氣後悔也後悔曰うとまやうまくは

久見詎を思ひうとうするあくといづ

### 空病 表機式

一履樹病

才一句始才二句始月也後報  
去は病をアキトナリ

まくとくまよりかみかにわくまの  
阿木のあわせをあくはみくまけ  
わくとくとくとくとくとくとくとく

多あくちあくがおきのがくわゆあを聞氣ちうく  
難うよのあくともあくとおとがとがとあく

二風燭病 每句才二字才五字用

嘗れすとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
わくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

是等の事はよりやうに思ひ難いものやよりやうのやうがり  
二胸尾病 ふくらはぎの筋肉のたるむき難い

いふかども筋肉のたるむき難いものや  
筋肉のたるむき難いものや

あらがまくねをひもねの  
おもむくえせどとまくを思ふ  
やうよもあもの下まをちりつ  
からかうるれよゆきをうちて  
なあさくれと物のこなうと

三疊尾病

地筋が癆風や オニモ詠を辛夷

山風よそくわひよしわよ  
うりいはるさくやまをもむむ  
あめうすふよしの春の山風よ

海枯石人

海枯石人瘦骨立

死病

アラカキモトヤマヒヨウスナ  
梅死もくろおぐくとひうも  
害ありぬまぬまれとひうも

是も下みよすの風すせびひ歌をもと

力遊風病

一句けのまこと終事と風

まくとも花もんと風ふんと

歌人の歌よすりまくられ

人情よもじせてもうれ

刀をもじみのこぎやまくらん

匂風風氣のと

六度歌病 二歌風氣

風氣のと風氣のと風氣のと風氣のと風氣のと  
一えつ八年の歌氣のと風氣のと風氣のと風氣のと風氣のと

歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと

歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと  
歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと  
といぢ成よすかふわくと

七遍牙病 二歌中中歌二まひと降風氣

新撰體體藝

歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと  
歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと

歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと

歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと

歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと

歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと

歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと歌氣のと

浦嘗風より方略三十千鷹をもといつてきや

己よ二ハ新擬體體夢也

以上式く夢やば外友人夢す事

一病そきわゆくよあすと今和ノ月とゑ  
さうめや 杜角小於をほよとくとせよまの  
れりとるむるすてあらうか

わきそせ乃はわまのとれあひりか一病そきわゆに

娘子の因より是平氣病も

一派のいわゆるあらじかとが急と久の見  
ぬと上因まわとこまのきのこまと極めり  
一八年を廻ん病よ向て八年病八年をうちれあ  
さあらむもの陽陰を合あひと見ひととあ  
るやかんむくひみをとせよそのとくとく

経考も食よび病後效難く

一經七年を八わよせちる無殊源成夢之古今也あはせ  
根多み院う合た勝別極ちわゆ一梅の花すとさ  
くろもかふふく

己八病方紫色下築よとせま之不言勝斗を度々  
夢之上古すハ解風の多也牙同ノ病許不夢未や也  
お合えかた代へ捨築不築を年を範のまゝ入築  
さ不為難之を際かどとれもかくももの度ひとく  
ふその度ニセキ度まつねや神りあやとづくま  
内相もくじつ物をみたりもやうのうをよむ多

抑句のあくひのあくひ不為病而後輕抄出病例が不  
以今文より今不取とめり陽句同のあくひ  
為病也 俗故曰凡方潔から下すへ用ひて一句は縁  
あわざる山のうへとひまよも歎を歌へて之  
あを極病之坐よ深ゆう古人不為れせひと  
聖故すと坐病が詠あくあるうき歌よそひの如也  
う食みゆ 離る也

二一蟲たとて於人ぬく但蟲數種因考者於人例也 一蟲  
たとひ不為原生所不も多為ね衣勝ゆ弘徽夏常  
系合義出於後原所後乳母不達性ち聞に就く合在  
後於原衣勝之條又後不為不為例も外小體え大  
臣之合を何乞北善也又抑空氣り左耳不及左耳  
乞句並ゆる不為病不為病也上右中左され  
も得とも無主瘦奇の一事後於不為病乞仲良又同  
かどく山のう乃まくそくあくひ  
ちとせらうふくうの代て食ん

並句不為病

一周心病がる雖用うの二あくひ也ヤあくひ外亂黒爛蝶  
波鷗死橘き相後極お病ハ唯ヨウクニカワモテ不為  
乾中飽も不為病也又巖樹風燭流私為死已上病到尾  
胸尾脾尾齧子寒風全不為病後輕上半句牛乳下半句  
因字是每句二字三字あくわるを雖不為病也此上一之同

字多をも或様病歎今古傷也半死病半死之合  
中榜諭之北強乾とくわお遍方病の康安母初が支  
仰うる捕親と夙月をこもぐせんをあるハシホトモ  
出立の爲め旅室を免れす食諭まくる邊のうち合  
うりかへ費之本の下風も鶴膝病や也勿通う  
や組み六毛障也病むやあや又疾き字地活眼後後  
日を合つて用事はあるがとたゞ詫うむとぞ乃  
事にあらひ咎と不也

一税うも勝レ朴社のりと諭もう又月定義うえ食二  
轍左吉日家衣七夕景おや承取定年う合一轍右日  
山とよめりう財大二象闇に云ひくうよりく(未だとせ  
たお猪とよみ字源實通某公氣也おもふ地う人との以  
御破縫之税う度うも元よもかう及内税も原  
かりうも秀也くよ一中れなうきととく赤溝うよ  
くもりあくともも居早ス速れ三年う合時うよ  
合よ税う居早見もあくじをあくじに不及る御税  
一中れ合よももももも不滿するど成る乾のを代々上  
右ともう徳是おもやうのうや但用ひふはまくとく  
用ひと御詔よもととれれれ後税もすととく山やよ  
凡基後もとくとくの日ともめりとくとく食あれよ  
無難只つ御う兼脅のうひ中山家うりとく和也さ  
あくと歌とあくと御詔よもととく山や

唐大ちの内官院より來乃様と申すを承季翁之板今  
乃あくろの御名を誠不<sup>レ</sup>々知今自らが那あたり生て季  
翁とよひゆるゆくや

一落樹病れても死なず將來合板東復復あ種乃ち  
多幸也とある御詮言も其日見死地源登死  
一月の内にわづぬの全生もと死のじ  
立てばけりとて死の約束もと死のじ  
食事と經行を遙聞多幸之あらんと云ふ  
立てばけり成る御或不即ち命よ

物の多く又難のものも機集する所多入る  
かくもとあらう事もあらわと  
かくを拂ふて教よどさず  
かくと對と教とむ陽流を食よ通後  
拂ふと食ふてかられりを  
かくはま日めおもひきつ

勝率是食日也

一月もとおはゆる難ひとけく八事山原をひくを  
かんとい角を小賊とまくとへ室山原をある  
アラヒと云ひ難や又も元も食よ山の海と云う  
うる新曆正月の前代かあるといふと云ふ  
を経のうなが車右衛門勝斗もと難之根達を  
かくもほりとて難死

一月もとおはゆる難天漁舟食事も多流万紫よ海くじ  
もと船せぬとすまよとぬ役也事も院も食ふ御房  
いきのくとあるの難を難死をかくもれぬまやのこ  
事も因も年を今年立と思も年も不候今年立ち  
也難死も元もせき入るもくとま難ともすと撃  
ますととくの難也またや医者也難も城内に  
もよし外仲良難多難のうちも高志かとを  
後難死もしくせんも先も深秋と云ふと  
難也嘗めの事とく塵もとほりもとを也難死

也後摺りあらむとては其とばく代入おれまの物と  
じきつるもといてはまくともも氣をも不る程より  
一月の内何がもとすらもてる病 痘年も礼年  
未だ氣食らひ食筋 介礼も未滿數年御方食中勢  
ね立志も未新充わす食筋なるも、或不為病も  
是ゆき病なり惟之多山の事多院方会勘判山家  
也かどりと後摺基後は體癌清捕不為病山  
高根用りせ或不病ともいひてハ病惟之多山湯院  
高食通後を一也山の事も解れどもかくも  
乃多氣ありきと又同の食筋経抄文空と漏二句よひれ  
ひくをらへてとてちよ重地強難先わや自ら  
馬鹿氣多公膳獨り人情はも圓白の食の阿昌う霧  
きよされひもとや白事のいろをくも人ふを  
らむといて後摺目獨り人あら切基緩不難伸矣為  
難今來う済の是と地病獨りとてふ人のあらうる  
是と今ひのとりのあらじる病のほまれが人を多  
の者とおひくといつても病や又病経は病と  
よあらじる人をあらこわせでくよハれとひくと  
凡くうきもと難辰辰也地源登免月も月年也  
と月日をもと難辰也地源登免月も月年也  
乃舟のアラシトハメ先も因河のアラシトハメ人滿井  
死故とあや病とニ素流大嘗を食す捕執御之故

と多き事あらずか余が所の令病相為れ代生年是は即ち病  
也三十満旬余勝年生て之を以て至る也と謂ふ  
地乃からまくあらゆる處所を滅ほす病焉代ふ  
とつひ來ておひづれ入病也もつれを  
よあひよあひまくの風よあひまくの風  
のねき病死迄無天國勝果報矣と象のむれ  
とひれりありまくの病也ほ日數家改計三  
そとやうせとがれ不病遠近うと後れる程病通  
後日改計病歎合す不勝病は多病也  
一月より風の病あり病ありとあらゆるも致

又免和  
其德

いふまへすまへわづかぬまへ

卷之三

گلستان

卷之三

今毛之毛不毛毛毛毛毛

是れは病と瘧むる範

卷之二

之医者曰よりうきとあらめを一そを難之  
一言ももと病はわざれど雖之基後す云うれ  
きとハセムトソリトモ内リといひ誠て紛太歌江  
門右大長テ神乃御ノヒソリヒスモアシテ  
めり基後難之をもふう内リテモヤ

一歌ちうの日も水めすともういふくじゆと代  
もほう多れか澄う二句をもるべ能強難とく勝  
采二句あくまほくめくも即うふすく

一歌花詠花見如紅葉詠花紫の空和水氣承曆  
再も陽院う合よみとひる不郎傳又内之を仍ば  
無意字文く北歌承曆承郁芳つ流歌合三所用  
ちかに詩歌歌既熱海歌がうあり天酒御奉り人をも  
あらすく引絶えを失ひをあらそむくかく連和テ食ぬ  
時も休理まくまづりてくをとむりてわとの内  
やうの秋歌のこどもんびう歌もといもひとと勝争い  
ほきの歌もて作歌くわくく古今下立といもと  
のう不ア勝斗をく北歌

一歌よ詠葉承くわくわく合よ基後う松くらきの  
もあを詠葉承も不歌以延齡あ歌あり 榆花山院  
え合よ詠叶の古代もいそくもそのがくア未だ  
君もくわくわくもんのひ是も歌う

一部云歌未だう歌難之を陽院う合歌得う未だ

すばやく経路あらすじに難波の東岸船を合ひて  
一泊主屋不難宿や死小浦繫と代多  
一泊意不考通寛和非友寄すよ諒意とし船先を船家

わゆまよめの人の想へるよ

りきり山を尋ねたりとく

與くともうかども北意の釋教より様人意

よもわくあり

一假條歌天國宮や後多但の体のよきと見ゆ  
と音歌の郭をあわてて後や

一北詔方免ま后まち公具風株梁を古に但玉詔之  
一急不過意がむかひ空波亦不急也而北詔而音歌  
乞北詔や但源氏相傳有無て立付疏波今急波  
不急也を免る

う合歌如鹿鳴謡みる門之

およこま禁豆抱きくお念おく逃び不登録と云作ゑ  
夢をかねる様う禁豆禁忌但のうなれ性度やかくよ  
中よ失くあると心琴うれ禁御由来うかりゆるよ  
刀くいはまうよれや度すくぞうひとよめくら鄰  
新松くふもれをくやや俊松抄曰塔川流仰くよれ  
野夏故都くまくの實すらむ者云其事 丹葉藻子の  
塔川流中文紀念充仲美うすまの力よれよめうら

主失如げ事今たまえ

用兵云極合周湯因わうりをもとえたりのさん  
とまゐるをもとめりとあすよひが不徳ほ骨  
筋なり且ともうらわゆみじきはうきを  
わらひ最敵敵也か今永成ば御りき代へ来のね  
山もくくとまくはけまくのうきとまくはよ  
て金城も入るやひも能く魚や思へ  
まくはれせうあり事めなきとまくはよ  
すも生よみとてまくは

可深而不可  
辨

是ハ勿事のくらうもん／只相處ものくらうわざ  
さうううう山 あせきをありてまくらうりわざ／はあくもうく  
きくふ そくくつもと野放 朴者山 いくらう山  
も育ひぬ山 海やもよもよやもよもよ海ハもすひと山ハもきぬき  
いづくこしまれきをきのくらう

烏  
拉  
齊  
烏  
拉  
齊

方舟よとよとよと  
うみの里  
とほきり

生れ  
ゆくや  
かほる乃と  
わがれ  
はのくひ  
りももと  
あゆのそと  
ゆく  
あめうち  
細原伊豆守  
今もと  
かくとゆきと  
かくとまく  
ひあくちゆ

説ありとての事よりひくも書かどいくらよぬ  
えんから死難するもほしく重くし承應亦  
今よきりのうりとえやうん經行夢之把  
除廢死の儀様や御内院中え死葬延年上御葬  
わざまくをもてからく未機死釈えむもと  
あたよりうき地獄や折りとくもれに松葉事  
何よりうき夢と清浦釈長引例接送すれども  
ふもわるふ梅の死源氏後元康保三年のうちひ  
て忌まく但下わが別りあれどうちうつ月とかも  
えきもわもて忌免但下とすまんを無むぢり  
も段似下向うり立めくわまくがくせるあくび釋式  
海之又不禁之 批うけうそめ ほるく見

あくとも わくも ときとめ こそきのえあ  
ふをせあ乃きの又御よそくもとくんよもく  
ふをよすりふとくなどくよじよーまくのせか  
様のうりれぬことほ思ひがくとあくと准之三年  
云あよきか家とくよまと但天濟う食よ物がく  
とくよの極えよくよめり自機あれも機をたぬ  
はくとよめりぬくとくと没機入室又文字  
を教ゆくよじよくよくおれおもくかくか  
ともあり う食あくよくわれりみ狀どみ

ばくのうのちめ もし屏風うらを數字多く見え  
る見ゆてよもよひてとじせりてといまんと  
生もうとくにほんとせふとくみはやく歌  
を正しくよめらむと若かじううすとたら  
きくと經路取池上舟とすよしよまゐるととく  
用池邊船の氣候等まよ涉草生と改て用時船な  
といひを用山とむわくとよあ波浪萬人  
匂とゆきよきはなれとこむ行ちゆきとあり如じう  
不つ殊斗聖亨公とのあゆみのひきはわり山家  
と山の松がとくらむとされ氣と風ひゆうかりわふ  
ら小聲とくらむとせんともせんとせんをゆくとくぬ  
きの爲めと一走りてまよせ能へらひくと  
一走りとおもれとあくとおもれをよしとを成  
ふとあらのうを基後詠もう浦とさとおのう

學書

万葉集以下代々勅撰の御文他書

号文家万葉集豪家勅撰也二本と書也序曰寛平又  
載秋九月廿又日下書延暦十三年八月廿一日  
他人稿也或說源ね云說之く如何

樹下築二十步多くは眼深奥

一丈足跡

山伏築根古志

底還りや

隆綱二事文集

續鶴十卷抄

元玉集十卷

周仲良本仿撰  
太宗元年朝金華集

拾遺古今廿卷

翁氏擬之序  
永光鈔詞集

續詞社集廿卷

有序忠光淳之為勑撰二系院嚴不差之

歌賦詩師三卷抄

号令機集

如山集不可勝計以外機名不設又古人不用或又  
機名在後抄多不復念而入道斯可

丘集子拾取經記

張仲懷拾遺空卷不具

丘集集廿卷 尾注擇之樓藏公機

有兩序敷光作之 以今後三自注 脊白頭

又步山階集機南於方稱月次集抄

荅荅文 空保而為

以拾遺年又多故不能用矣

抄物集

方繁集集抄

以空抄勢之機之  
廿卷抄不似機者

類聚歌林

山一候此機有平水院  
通憲錄也

新機空集

勢之古今後機但不奏之  
古今亦三百六十卷

金部集一卷

空機之機

六林集

勢之歌義的觀之

乘流集

作毛家山入石十卷

新機歌詠集二卷

空機之後

續新機

通後機 機拾空內三百六十卷

以得抄 空機

數數集

勢之十卷

仲良 有序

枕目抄

空機

打樸立

月私記

空

影林白世事 清補房合冊事 百三三十卷 雜三十卷

諸家部類 撰志不知 累足後序多之

久代為不 范竟

如之物多以通不勝計故而多通不用通之以示施固  
影林抄一卷 磬鹿記抄 善勇抄三卷 素集形服私記  
古今傳山中多兔因染 古板指抄 包集十卷 玄集  
鶩毛族物大以廣徑上解抄二卷 數數取古染廿卷  
敷陰抄近日又歛之未入之

空家式

欽經標式

參從勝 濟成奉勑

源雅式

序

又家體體

新擬體體

三經

後於無名抄

緝懷抄

仲良

奧修抄宣室

清補

以白女以鵠澄源以鵠以下承之是范竟多蒙抄

清補幼學一字後成古東風拂木在清以鵠爲也

又如今色深十脚三鵠九亦未抄物不勝計也

物錄

修淨上下 大和上下 清氏又十空抄

此外相傳非強亂要

難

都集

都方合

自楚中  
到信家

難而不易

私記

此中之雅人記或可存

臺集子九指

浩浦

观海集

敦朴

拾遺觀海集

恩盛

玄菟抄

俊惠

观海集已下二箇度全擬葉集筆述而不被書

入之矣不以不錄之也

三爻代集後感

花竹集

附光

拾遺玄菟抄

浩浦元年八月  
披羅之附光

玄索廣云

海內在良

附光

拾遺玄菟抄

浩浦元年八月  
亞相

盧生

楊基法師

六指

後半身主

拾遺大綱之

浩浦

渙松中納之

校衣大綱

六身主

拾遺大綱之

浩浦

祝破

玄菟抄

伯叔

浩浦

黎九品海義

孫少玄光月

越古日記

傳翁父母

塘川院日記

慶次

伯叔以傳

新世六人墓錄

六指

范義光

印光壁言

浩浦

山木髓體

後光

玄菟抄

附山木髓體云  
浩浦

今撫榮

浩浦

玄菟抄

浩浦

後現寂

敦仲

玄菟抄

浩浦

維亦撫

浩浦

玄菟抄

浩浦

班子載

後金  
卷之二  
卷之三

山齋集

惠光房據  
已傳家延

三斗集

吳辰

山齋集

經周

荊谿春花集

卷之三  
卷之四

仁和集

卷之二  
卷之三

仁和集

卷之四

宋林抄

新錄

百濟門

本紀

百歌抄

新感  
大和前司

寶物集

康乾

世古今十八集

卷之三  
卷之四

大原集

法信  
後文

眉月集

新舊注眼  
卷之二  
卷之三

右近拾遺

大府元年  
卷之二

日本紀

卷之三  
卷之四

絶妙集

新舊注眼  
卷之二  
卷之三

絶妙集

新舊注眼  
卷之二  
卷之三

數聚

新舊注眼  
卷之二  
卷之三

阿彌抄

卷之二

經開

卷之二  
卷之三

八雲抄

卷之二  
卷之三

卷第一終

神津

二十卷  
卷之二



慶安四年卯曆二月

書林

中野道也綾梓

